

## 第6回寺子屋・笠木透コンサート（2007，10，21）

「歌った以上はそのように生きろ！ やれないことは歌うな」

### 第1部の記録、第2部の抜粋記録

第6回寺子屋・笠木コンサートは、笠木さんのたっぷりのトークと全18曲の歌と演奏で、雑花塾は増田康記、佐藤せいごう、田口修、ピアノは安達元彦という豪華メンバーでした。

漫談風の笠木さんのトークは、歌の言葉とあいまって、笑いながらも深く考えさせられ、記憶に残る一日となりました。

### 第1部（13：00～15：00）

♪『海に向って』                      アメリカ民謡  
演奏・笠木透と雑花塾

私はひとり海に向って 立っているのです  
海の風に吹かれながら 立ちつくしているのです  
こわれる世界をとめようもありません  
わかっているのにどうにもできないのです

.....

**笠木** 寺子屋でやるコンサートは、いつものとは違うものかと考えている。

今回のタイトルは「歌った以上はそのように生きろ！ やれないことは歌うな」としたが、これは昔から言いたかったことだ。

だから今日は、一緒に歌いましょうとは言わない。無理して歌わなくてもいいということです。一般的には「歌いましょう」と言われたら、「ぼくはきらいだ、歌わない」とは言いにくいし、マナーで歌うということになるが、今日は歌わないでほしい。僕の友だちで「この歌はきらいだから歌わない」と言う人がいる。その歌のレコーディングの時もいたのに歌わなかった。でも今でもずっと友だちだ。それでいいと思う。無理して支持したり、皆の手前でということをやると、歌の原点を見失ってしまう。しかし、歌わない時の顔つきはむずかしいからよく考えて！ 今日のコンサートは、自分に正直に付き合ってください。

今のプロの人間たちは特に、歌の中身と自分のやっていることとは無関係に生きている。「歌ったらそのように生きろ！」というのは厳しいことだが、歌は歌、暮しは暮しということで分裂した生き方をしていると、自分で自分がわからなくなるという天罰が下ると思う。法律でどうこうと言うことではないが、天罰が下る。今日はなかなか宗教的ですよ。

昔、文字がない時代、言葉には魂があるとわれ、「言霊」と言われていた。言葉を裏切ってはいけない、言った言葉に伴って現実が表れてくるから、それを受け止めなさいということで、し

やべる言葉が信じられていた。でも現代は、言葉の裏ばかり考えるようになって、言葉を額面どおり受け取るのは不可能な時代に私たちは生きている。ダブルスタンダードで使い分けをしている。そうしないと世の中からはみ出してしまうことにもなる。

ところで、明治、大正時代に生きて、言葉についてたいへん悩み苦しんだ人がいた。宮澤賢治です。今よりももっと言葉が信じられる時代であったにもかかわらず、彼が人の言葉が信じられなくて悩む姿があちこちに表れている。最初に出版された本は「春と修羅」で、自分には分かるところと分からないところがあるので、分かるところにだけ曲をつけました。

♪『春と修羅』

詩・宮澤賢治 曲・笠木透

演奏・笠木透、安達元彦

怒りののがさ また 青さ 四月の気層の 光の底を  
唾（ツバキ）しはぎしり ゆききする おれはひとりの修羅なのだ

ヒノキの梢 静かにゆすれ 鳥はまた 空を切る  
まことの言葉はここになく 修羅の涙は 土に降る

**笠木** 修羅は仏教用語だが、人間と動物の中間の生き物ということです。賢治はたぶん、その時代に生きている人間はまだ人間になっていないと思っていたのではないか。なぜ修羅か？ここまですべて人類が歩いてきて人間は、戦争が終わった時もうやめようと何度反省したか、それでもまだ止められないのは、修羅だからだ。まことの人間になれば、人間が人間を殺すというようなことはおそらくしないはずだ。アフリカでは餓えて死んでいく子どもが大勢いるのに、われわれは平気で食べ物を残したり捨てたりする飽食の時代を生きている。人間なら悩むはずだが、自分で自分を律することができないのは修羅だからだ。

本音を言っても受け止めてもらえて、不利益をこうむらない社会ならもっと生きやすいと思うが、今、会社で本音を言ったらどういうことになるか、みなさんは良く知っている。私は昔、日本の高度成長のど真ん中で、2年で会社を辞めた。フリーターのはしりだった。学研というところに入って給料はたくさんもらったが、辞めた理由の一つは「残業はいやだ」と言ったからだった。本当の言葉をしゃべれない。

『自由』という曲を、岡田さんと私で作った時、非難ごうごうだった。なぜか？ その原因は私の繰り返しの歌詞にあった。

「自由は戦い取るものではなく、求め続けるものだから」

今までの歴史は、銃を持って戦い取ってきた歴史だと教わってきた。アメリカはイギリスと戦い、自由と独立を勝ち取った。しかしそのアメリカは、銃を持ってベトナムの自由を奪いに行った。おかしいんじゃないか。その考えの元には暴力があるんじゃないか。それでは、本当に自由を戦い取ったことにはならないのではないか、というのが歌の意味です。どのような最高の価値、それがたとえ「自由」であっても、戦い取るのは非暴力でありたい。先日の沖縄の11万人集会が私たちを励ましているように、非暴力で、世論の力や文化の力で戦い取りたいと思うのです。

♪ 『自由』

詩・笠木透 曲・岡田京子

演奏・笠木透と雑花塾、岡田京子

鳥のように 空を飛ぶ鳥のように  
自由に生きる 自由はすばらしい

でもたとえ自由のためだろうと 私は銃は取らないだろう  
自由は戦い取るものではなく 求め続けるものだから

.....

やはり自由は戦い取りたいと思う人はこの歌は歌わなくていいんです。どんなに大切なものでも武力や暴力はダメと思う人や、共感するところがある人は、いっしょに歌ってください。それを自分自分で判断して行ってください。そういうことをしっかりやっていると、自分が見えてくるのではないかとも思います。

**Human Rights** は、英語で人権という言葉です。なぜわざわざ英語で言うのか、これには訳があるんです。憲法のことを今、大問題になっていて、憲法は押し付けられたものだという人がいるが、押し付けられたのは当時の権力者や政治家やリーダーたちで、GHQが出してきたものがあまりに民主的だったのでびっくり仰天したわけです。彼らは、天皇を中心とした明治憲法を少し変えればいぐらいに思っていた。だけど、自由・民主主義・平和が欲しかった人々は、いい憲法だと思ったんです。

『日本の青空』という映画があるが、そこでは憲法の成り立ちが描かれている。学校ではほとんど教えていないことだし、伝わっていない。鈴木安蔵らの研究者たちが憲法草案を作っていたのだが、鈴木は明治の自由民権論者、植木枝盛を研究している。植木は憲法原論で権利や人権を認め、沖縄独立論まで書いた人物だ。鈴木たちが作った憲法草案を見て、GHQは日本にも民主主義のルーツがあったということで、それを基にして、GHQ案を作った。時の権力者たちは、仕方なくこれを受け入れたのだが、一箇所、敵もさるものと言わざるを得ないからくりがある。GHQ案には、人民（**People**）しか出てこないし、主権は人民にあると書いてある。そこを国民に変えた。これはなかなかのトリックだ。我々は日本国民であろうがどうだろうが人間である。ところが憲法には「国民には基本的人権がある」と書いてある。日本には、日本人でない外国人も、亡命して何国人でもない人もいるが、そういう人には人権はないのか。日本国民であることを前提にすると、現にいろいろな問題が起きてきている。我々は人間、**People** であるから、**People** という言葉に置き換えるべきだと思う、ということで歌を作りました。

♪ 『Human Rights』

詩・笠木透 曲・岩田美樹

演奏・笠木透と雑花塾

憲法があるから 人権があるではありません  
人権があるから 憲法があるのです

Human Rights 人間の権利  
かけがえのない ひとりよ輝け  
Human Rights 人間の権利  
たったひとつの 生命よ燃えろ

.....

**笠木** ぼくは替え歌が大好きで、替え歌研究会を作っている。日本には、替え歌のすばらしい歴史がある。今では、歌を作ったり歌ったりすることは自由になってきているが、普通の凡人が歌を作るなどということは考えもしなかった時代が長く続いていた。農作業の必要から、自分たちで民謡を作ったり歌ったりする時代はあったが、近代化する中でその必要がなくなってきた、民謡は忘れ去られていった。それと、明治以来、文部省の政策で、西洋音楽ばかりを重視して、日本の音楽を切り捨ててしまった結果でもある。どこの国でも、外国の音楽を取り入れても、伝統的な民族音楽は教えているものだが、日本はそうではなかった。でも沖縄は違いますね。いくら西洋音楽が入ってきても、沖縄の歌やサンシン(三線)の音楽は続いているし、発展してきている。そうあるべきですね。

でも、日本では明治維新以来、片方の日本の音楽を切り捨ててしまったので、自分たちの音楽に対して冷たくなってしまった中で、自分たちで音楽を作る能力は開いていかなかった。自分たちで作る力がなければ、替え歌を作って歌い、戦っていった歴史があった。この間、兵庫県で閉校になるという学校へ行って一緒に校歌を歌ったのだが、その曲が何と鉄道唱歌の替え歌だった。歌詞は自分たちで作ったもので、おばあさんたちは涙を流して歌っていた。

これから私が作った障害者のことを歌った替え歌を歌います。これは野口雨情の作った「証城寺のたぬきばやし」の替え歌です。この曲は替え歌がいっぱいできているが、一番有名なのが、NHKから流れたものだ。

戦前、英語は敵性言語と言って禁止されていた。でもアメリカは日本との開戦後、日本の研究を始めた国ですよ。ところが日本は戦争に負けたとたんに、NHKの英会話という番組で流れたテーマソングが、「証城寺のたぬきばやし」の替え歌で、「カム、カム、エブリボディ、ハウドゥユウドゥ、アンド、ハウアーユー.....」と歌っていた。聞いた覚えがあるでしょ。コロッと変わったんですよ。この国の大人たちの変わり身の速さはすごかった。

(渡辺善行、奥田卓也、吉岡豊 登場)

**笠木** ここに出てきたのは、障害者バンドです。私の友人の不良障害者です。私は悪口を歌って、それにアンサーソングで彼らが「ちがうでー」ということを歌います。

♪替え歌『しよ、しよ、障害者』 詩・笠木透 曲・野口雨情  
演奏・障害者バンド、笠木透と雑花塾

しよ、しよ、障害者、障害者の証拠には  
う、う、腕が片方ない、ない、ない  
おいらの友だちは 片手落ち、片手落ち

負けるな、負けるな、悪口に負けるな  
来い、来い、来い、来い、来い、来い  
みんな出て来い、来い、来い

.....

**笠木** ここにいる渡辺が20曲ぐらい作っているの、そのうち不良障害者コンサートを開きたいと思っています。

日本には差別用語と言われるものがある。私は放送の仕事をしているが、放送でそんなことを言うと、えらい勢いで抗議の電話がかかってくる。だが私は言葉は状態を表しているのであって、言葉自体が差別ではないと思っている。片手落ちと言っても差別ではない。そういう心情で言った時、差別用語になる。だけどその都度その人の心理状態を調べるのはたいへんだから、差別用語を使わなければ差別はないものとしてしまった。だから差別用語さえ使わなければ、自らの中にある差別意識に目をつぶることができる。でも差別が無くなったわけではない。差別がある限り、どんな言葉でも差別語になりうるし、差別は生れる。

私はお互いに悪口を言える関係まで行きたいんです。それが言えて初めて差別が乗り越えられると思っている。悪口が言えるのは、人間としての関係があるから言えるのであって、脇で見ている人が、問題だというのはおかしい。言葉は難しいと思う。その人の生き方や考え方や思想や感情まで含めてその言葉を判断しなければ、本当のことは分からない。

しかし、言葉があるからこそ、我々は共通の問題を語ることができるし、人間の未来のことも語るすることができる。言葉がなければこれはとても難しいことだ。文化のルーツは言葉だし、言葉がなければ文化は生れない。

その言葉を禁止したのが私たちです。1910年に日韓併合した。併合というのは言葉のあやで植民地にした。その植民地政策の一つとして最もひどいことをしたと思うのは、朝鮮語を禁止したことだ。そして名前も日本名に変えさせた。民族の原点であり、文化の源である言葉を禁止したのは、おそらく日本だけでしょう。白人も他国を植民地にしたし、白人の言葉を覚えなさいとは言ったが、その国の言葉を禁止はしなかった。そのことを、小学生や中学生は、日本がした歴史上の一番の悪行を認識しているだろうか。言葉を奪われたらどういうことになるかを想像してごらんくださいという歌を作りました。

♪『言葉』 詩・笠木透 曲・上田達生  
演奏・増田康記、安達元彦

君は言葉を奪われたことがあるか  
言葉を奪われた悲しさを思ったことがあるか  
どんな時代でもどこの国でも  
人々はその国の言葉でそれぞれの思いを表現してきた  
それが生きるということだった

言葉を奪われた時、その哀切はどれほどのものだったのだろう

かつてこの国はあなたの国に何をしたのか  
過去を変えることができないとしたら  
今、私たちにできることは何だろう

.....

**笠木** 日本の権力者たちはすごいことをやったと思います。言葉を禁止した。小学校、中学校の校長は日本人だったが、教師は朝鮮人だった。歌も文部省唱歌を押し付けられていた。だから、70代以上の朝鮮人はたいてい日本語がしゃべれるし、歌も歌える。強制されたわけです。しかし、朝鮮の文化は朝鮮語でしか伝わらない。心ある人たちは何とか朝鮮語を守ろうとした。もし子どもたちが言葉を忘れていったら、伝統的な朝鮮文化が死んでしまう、民族としての一体感や自らのアイデンティティーや人間の誇りを失ってしまうという危機感を持った作曲家や作詞家たちは、ひそかに、禁止されていた朝鮮語で新しい歌を作り始めていく。まさに文化の闘いです。ガリ版で刷ったハングルの譜面と歌詞を、現場の教師に手紙で送った。教師たちは、音楽の時間では歌えないので、ひそかに新しい朝鮮の歌を子どもたちに教えていった。子どもたちは覚えて家に帰り、親たちに教えた。そして日本の統治者たちが知らないうちに、反日の歌が全土に広がっていった。

見つかれば牢屋に放り込まれる時代に、命をかけて子どもたちに、ハングルの歌を教え続けた教師たちがいた。言葉というものはすごいなあと改めて思い、言葉を教えるというのは文化なんだと思った。そこには、子どもたちに言葉を手渡していくという最もすばらしい教師らしい姿があると思った。ふりかえって、自分たち日本人は、言葉にそれほど真剣に向き合ったことがあるだろうかと思われた。

韓国に行くといつも、かつて悪いことをした日本人の一人として後ろめたい気持ちがする。沖縄に行ってもそう思う。

1910年の日韓併合の後、言論と集会の自由を徹底的に奪われながらも、1919年3月1日に独立運動が始る。日本の教科書には「万歳事件」と書いてある。それを用意したのは日本に留学していた朝鮮人で、独立宣言文を書いて準備し、パゴタ公園でそれを読んでデモをした。このデモが全くの非暴力だった。反日の言葉は一切言わず、「マンセーイ」(バンザイ)とだけ言って歩いた。それでもじゅうぶん皆の心を打った。叫ぶような、泣くような、むせぶようなこの声は「独立万歳」と聞こえる。人間はそういう想像力、感性を持っているはずだ。

一方、1910年日韓併合の時、日本人は日比谷公園あたりをちょうちん行列をして「バンザイ」といって行進した。その言葉の中に含まれた「日本は領土が増えて一等国になった」というような傲慢さやむなしさ、その二つの言葉に秘められた言葉の響きの違いが聞き分けられるか。

「マンセーイ」という言葉の響きの中に、人間の悲しさや、独立への思いや、人間としての叫びを聞き取ることができるはずだ。それが音楽の原点だとぼくは思う。解説してもらったから分かるというレベルでは困る。「マンセーイ」という言葉の響きから感じ取れる感性と想像力が人間にはあるはずだ。それがすり切れているとしたら、人間としてもういっぺん勉強してほしいと言

いたい。

教師たちが子どもたちに教えていった歌の中の名曲の一つが、『故郷の春』です。

♪ 『故郷の春』 詩・李元寿 曲・洪蘭坡（ホンランパ） 訳・笠木透  
演奏・増田康記、安達元彦

私の故郷 花の村 モモの花 アンズの花 ヤマツツジ  
色とりどりの花もよう 遊んだあの日がなつかしい

.....

**笠木** この歌は、またたく間に全土に広がっていった。日本の支配者たちが知らない所で、みんなの愛唱歌になっていった。

金大中さんが大統領に就任した時にソウルの大ホールで演説があった。その演説が終わった後、この『故郷の春』を、誰が指揮したわけでもないのに会場のみなさんが自然に歌いだして大合唱になったという話が伝わってきています。これが国歌です。

「君が代」を歌わなければ懲罰を食らうような国とは違いますね。私は「君が代」は歌いたくない、中身を考えてどうしても歌いたくない。この民主主義の時代に、「天皇の世は永遠に続く」なんて心の底から歌えるはずがない。音楽的にも民族音楽の旋律とは違うし、違和感がある。しかもその歌で侵略し、世界を戦争に巻き込んでいったのだから、よけい問題です。

私は「君が代」の替え歌運動をやっていますが、明治の終わり頃から、「君が代」の替え歌はたくさんできています。歌いたくないが建前上歌わざるを得ない時、例えば村の消防団の始まりには必ず国旗掲揚と君が代斉唱がある。歌わないと村八分になってしまう。今の学校現場もそうですね。そういう時に、歌わなければならないし歌いたくない時に、替え歌を歌おう。小さい声でね。ずるいけれど、そういう逃げ方があってもいいのではないかな。

山形の小学生が歌っていたのは

♪ きみがよは ちよにやちよに サザエ イソノ マスオとなりて  
コケは蒸しても コケのまま

**笠木** これが、文化的なみごとな抵抗です。大人にも抵抗の替え歌がある。♪「われらが世は・・・」これなら歌えるんじゃないかな。

歌いたくない歌は、そうやって抵抗するしかない場合もある。

チラシにも書いてあるが、わたしの青春は砂川闘争だった。大学に入ったとたんに砂川闘争にぶつかった。私は背が大きくて声も大きかったので、学生自治会の役員になって、デモの先頭に立っていた。当時はハンドマイクが無かったので。あの頃は、学生も農民も文化人も労働者も砂川基地拡張反対運動で走りまわった。あの時と60年安保の闘いが今も心の中に刻まれている。私の原点が砂川闘争だった。あの時は、いろんな職業の人やいろんな階層の人やいろんな考えの人と一緒に闘った。飯もろくに無く、寝るところも無い。体育館で寝ながら闘った。杭を

打つ測量隊と対峙して僕らは闘ったが、結局警官隊によって排除されてしまった。負けたんです。負けた時に誰からともなく出てきた歌が『赤とんぼ』だった。私も泣きながら歌った。でも帰りの電車の中で、負けた時に歌う歌はあれでいいのかと思った。あのようなノスタルジックな歌でいいのか。負けた時の歌はないのかと思いながら帰った。負けた、でもおれたちはまた再び立ち上がっていくぞという、歌ってまた元気を出していく歌が欲しかった。

フォークソングの始まりの頃には、『友よ』などがあってぼくも歌った。

♪「友よ。夜明け前の闇の中で・・・・・・・・夜明けは近い・・・」

でも、40年経っても夜明けにならない「夜明けは近い」とはどういうことか。

『We Shall Overcome』の日本語訳は「勝利の日まで闘いぬくぞ・・・」だが、今はもうだれも歌わない。そう簡単にはいかん。でも英語なら歌える。そんな大げさなことではなくて、英語では「Someday」いつの日か勝つ日が来るだろうと言っている。これなら私たちの心情に近いし、切なさとほのかな希望をこめて歌える。

だから、40年前に『友よ』を歌って、夜明けは近いと思ってしまった浅はかさは、思い出すだけでもいやだ。あの時に、違うぞ、そう簡単にはいかんぞと言うべきだった。絶望と不安を抱えながら立ち上がっていく、そういう人間らしい心情に答える歌を歌いたかったが、日本にはなかった。本当に我々に必要だった歌を専門家は作れなかった。私は日本の専門家には不信を持っている。

ある時私は、負けた時に歌う歌を見つけた。『朝露』です。

この曲は、韓国の軍国主義の中で、反共を叫ぶ大変な非民主主義的な国の中で、恐れおののきながら自由を求め、独立を求め、平和を求めて闘っていた韓国の文化人や、詩人や、フォークシンガーたちに名曲と言われている。

金ミンギの『朝露』こそ、負けた時に歌う歌だと私は思う。この歌には簡単な、能天気な希望は出てきませんが、それでも立ち上がって生きていこうとしている人間の決意や、おそれを持ちながら生きていこうとしている人間のふるいつきたくなるような人間性を感じます。

念のために申し上げますが、私の言っていることは、研究した上でその成果をしゃべっているわけではなく、全くの思いつきです。前の二人の講師は、長いこと積み重ねてこられた理論と、日本の現状を憂えた基本的な人間としてののりりしい発想で発言された、日本の未来を思えばこそすばらしい内容です。私は思いつきですから、信用しないように、まず私から疑えと言いたいと思います。

♪ 『朝露』 詩、曲・金敏基 訳・笠木透  
演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦

長い夜が明けた 草の葉に朝露  
人々の落とした涙のようで 悲しみがキラキラ光っている  
朝焼けの丘に立って 心も晴れていく  
陽ざしをあびて 消えてゆく朝露  
でも時代は決して 後戻りはしないだろう



私は行く 荒野をめざして  
悲しみを越えて 私は行く

.....

(第1部終了)

(寺子屋給食とグループミーティング)

## 第2部 (16:45~18:00) からの抜粋

**笠木** 私がフォークソングに触れて歌を歌い始めた時に、初めて作った(1972年)のがこの歌でした。

♪ 『私の子どもたちへ』 詩、曲・笠木透  
演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦

生きている鳥たちが 生きて飛びまわる空を  
あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは

目をとじてごらんなさい 山が見えるでしょう  
近づいてごらんなさい こぶしの花があるでしょう

.....

**笠木** 子どもたちに美しい自然を「残しておいてやれるだろうか」、私は自信もなく、無力な父親だったが、何か子どもたちにやってやれることはないだろうかと思って作った。おろおろしながらも「やれるだろうか」と、どうしても言いたかった。40年経った今でも、「だろうか」がついている。断言することはできないが、おろおろしながらやっていくことも大事ではないか。

四万十川は、高知県の西の方にある美しい川です。日本の美しい川の代表です。「四万十」は、もともとアイヌ語の「シマムタ」からきていて、「美しい」という意味です。アイヌ語は、地理や自然の状況のみごとに表現している。自然と共生していたアイヌの人たちが語っていた言葉のすばらしさを思う。

♪ 『四万十川』 詩・笠木透 曲・藤田昌大  
演奏・笠木透と雑花塾

春のあかむらさき カタクリの花 岩の間から 水は流れる  
アイヌの人たちが いたころは ここはブナの 原生林だった  
夏の白い花 トサシモツケ 緑に染まって 水は流れる  
魚を育て 花を咲かせ 曲がりくねって 川は流れる

いつかは海へ 行きつくのだから ゆっくりしよう 急ぐことはない  
ゆうゆうと ゆうゆうと 流れる川よ シمامタ おまえの名は美しい川

.....

**笠木** 川は山の源流から流れ出して山を下り、そのままスッと海へ入ればいいのだが、四万十川は海の近くまで来ながら、すばらしい蛇行をくりかえして、やっと海へ抜けていくのです。我々も生れてから死に向って行くのだが、あわてることはない。蛇行するのが人生で、そこに魚が住み、子どもが泳ぎ、生活がある。私が蛇行を教えてもらった川です。

琉球方言のことを話したい。私たちは先日の沖縄での 11 万集会に励まされているが、沖縄の人たちの言葉に「他人から傷つけられても寝ることはできるが、他人を傷つけたら寝ることができない」(ちゆにくるさってんにんだりしが、ちゆにくるちえにんだらん)があります。これが人間のやさしさの原点ではないか。それをもっと学んで、もっと日本語の中にも作っていく必要があるのではないか。沖縄のことを思いながら作りました。

♪ 『私の島』 詩・笠木透 曲・坂庭賢享  
演奏・笠木透と雑花塾

青く輝くさんご礁の島 人々は海で働く  
魚を取ったり 貝を拾ったり 緑したたる命の島 命の海  
ニカラカナイの海があるなら そこに私の島があるでしょう

他人(ちゆ)にくるさってん 寝(に)んだりしが  
他人(ちゆ)にくるちえ 寝(に)んだらん

.....

**笠木** この沖縄の言葉を聞いて、日本にも非暴力、武器で抵抗しない伝統があったと感動しました。朝鮮の 1919 年 3・1 独立運動の非暴力は、非暴力でイギリスと戦ったインドのガンジーに影響を与えている。そのガンジーに非暴力を学んだのは、キング牧師です。アメリカの強大な権力と戦った公民権運動の中から、『We Shall Overcome』も生れている。自分たちの文化のルーツに、そういう非暴力の文化運動があるということを認識したい。

憲法九条の運動の中で、武器を持たないのは簡単なことではないこと、さらには非暴力についても学んで行ってほしい。

大阪のある中学校から校歌を作ってほしいという依頼がありました。私は大人が押しつけるような歌は作りたくなかった。自分たちが歌いたくなるような歌にしたかった。

♪ 『松原第七中学校校歌』 詩・笠木透 曲・坂庭賢享  
演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦

森の緑を見つめている 鹿のようなひとみきらめき

未来を思えば心ふるえて 走りだしたい青春ならば

野に咲く花が好きな人たち 心やさしいこの町で生まれ育った私たち  
七つの星は仲間のしるし 私の松原第七中学校

.....

**笠木** 学校の行き帰りで、子どもたちは自然にこの歌を歌っているそうです。私はわが意を得たりと思っています。

那須にある「なすの園」の歌を作るときはたいへん困った。言葉を発しない子どもたちの歌をどうやって作ったらいいか。でもやっと作ったら、お母さんたちが子どもに歌うようになった。子どもたちには、お母さんの呼吸というか、周波数、オーラが伝わっていくようです。ここの教師たちは、毎日毎日反応のない子どもたちに言葉をかけ続け、3年目にやっと唇がちょっと動いたとって感動している。こんな無名の教師たちがたくさんいるから、この国は持っているんだと思う。

**笠木** 『軟弱者』を歌います。

♪ 『軟弱者』

詩・笠木透 曲・増田康記

演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦

この国を守るために 軍隊がなくてはならないとしたら  
軍隊がなくては滅びて行くとしたら 滅びて行こうではないか

私たちはどんなことがあっても 戦力は持たない  
私たちは何と言われようと 戦争はしない

.....

**笠木** ぼくの友人は「敵が来たら、一撃食らわしてから死にたい」と言って、この歌は歌いません。そういう人がいてもいい。「何と言われようと武器は持たない」と言うにはたいへんな覚悟が必要だ。現に先の戦争では、戦場に行きたくないと思っても、「非国民」と言われては、「自分はいいけれど、子どもたちのことを思うと」と言って従った人も多い。だから「九条を守ろう」というのは、生やさしいことではない。非暴力でいくというのは、厳しい選択だ。むしろ武器を持って戦う方が楽なことだが、そうするといつになっても戦争は終わらない。だから苦難の道を行くしかないが、それが「九条」の道だ。言葉に忠実に生きるのはたいへんなことだ。

『ANSWER』という歌を歌います。アメリカで、イラク戦争に反対するデモの人々が持っていたプラカードの頭文字です。「Act Now Stop War End Racism」、「いま始めよう、戦争と差別をとめよう」という意味です。戦争の大元に差別があるのは、歴史の事実です。戦前の教育は、

アジアの人々は遅れているから日本人が指導していかなければならないというものだった。はっきりとした差別語があった。

♪ 『ANSWER』

詩・笠木透 曲・佐藤せいごう

演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦

大都会の道路をうめつくし アンサー アンサー  
人々の声が呼びかける アンサー アンサー  
人々の声が応えている アクト・ナウ 平和のために  
出来ることから いま始めよう

Act Now Stop War End Racism ANSWER

人びとの世論が戦争をとめるだろう

時代は変わって行く

.....

**笠木** 私は、世論が戦争をとめる時代が来ているような気がしている。国際世論が非道なことを追いつめていくだけの力を持っているのではないか。みなさんとこの歌を歌う時、どこかに「時代は変わって行く」という実感が裏打ちされていると思う。

『ピース・ナイン』という歌を歌います。「九条を守ろう」という運動が広がる中で、大人も子どもも音痴も誰でもすぐに覚えられてすぐに歌える歌を作ってくれと友人に頼まれた。そして作ったのがこれで、作曲は、「とーふー、やきいもーに続くピースナインを作ってほしい」と寺子屋学長の岡田京子さんに頼みました。少し解説してください。

**岡田** この歌は日本の民謡音階でできています。普通、音階というものは自分たちやその民族が、日頃使っている音を、低い音から高い音まで順番に並べると出来るのです。この「民謡音階」は、日本だけでなく、韓国、中国、ベトナム、モンゴル、沖縄というアジアの広い範囲、そしてヨーロッパの古いものとも共通した音階なのですが、なぜ同じ音階なのに各国で音楽がこんなに違うかということ、それはそれぞれの民族の言葉が違うからで、それが音楽や歌の抑揚、節回しを作っているからです。

そういうことがわかると、新しい形で作曲する方法もひろがって、ごく普通の人たちも一緒に曲を作ることも増えてきました。日常に使っている言葉の抑揚や節回しがメロディになった時には、現代でも私たち日本人にグッと来る説得力を持てきます。とはいえ、笠木さんからこの詩(ピース・ナイン)をもらって曲を作るのは結構難しかったです。

もう一つ、この音階で作られた曲ですばらしいと思うのは『わが大地のうた』です。この曲は、もう 30 年近く前に、笠木さんの詩に「我夢土下座」の田口正和さんが作曲したものです。当時、田口さんは民謡音階を認識してはおられなかったと思いますが、笠木さんの言葉(詩)から直感的につかみ取った音がこれだったんだと思います。

ですから「民謡音階と旋法(言葉の抑揚)」を意識するという事は大事な事だとは思いますが、現代人は、マスコミの音楽などで耳の中がいっぱいになっていますから、知識が多すぎて、捨てられないものもまた多すぎて、すなおにこの音階を感じられなくなっている人も多いのです。

**笠木** この曲にクッキングハウスのみなさんが踊りをつけたので、いっしょに歌って踊りましょう。クッキングハウスのみなさん出てきてください。

♪ 『ピース・ナイン』 詩・笠木透 曲・岡田京子  
演奏と踊り・笠木透と雑花塾、安達元彦、田中智子、とクッキングハウスのみなさん

鳩は平和を運ぶ鳥 九の鳥と書くのだから  
カタルーニャの鳥も 日本の鳥も ピース ピース ピースとさえずる  
この世は九で十分なのさ  
鳩よ世界の空で鳴け  
ピース ピース ピース ピース ピース・ナイン

**笠木** クッキングハウスの松浦幸子さん、クッキングハウスを紹介してください。

**松浦** クッキングハウスは調布の町にあります。人生の途中で心の病気になった人たちの居場所です。みんなで集まってご飯を食べる「おいしいね」から始まりました。それからレストランとテイルームができました。次に夕飯をみんなで作って食べているクッキングスターができました。心の病気を体験した人たちですが、みんな元気に暮らしています。20周年記念に向けて、岡田京子さんにみんなの心の中には音楽の種があるということをお教わってもらって、みんなで3曲を作りました。それらの曲も入れたミュージカルを、記念のお祝い会で発表します。今日は、15周年記念の時のお祝いで、笠木さんがプレゼントして下さった『不思議なレストラン』を歌います。すっかり私たちの歌になっています。

♪ 『不思議なレストラン』 詩・笠木透 曲・山本忠生  
演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦、クッキングハウス

一人ひとりそれぞれが胸に抱いてきた  
悲しさという名の透明な水を やかんにつめてお湯を沸かそう  
白い湯気が立ちのぼっていく お茶を入れて皆で飲もう

外には冷たい風が吹いていても ここは暖かクッキングハウス  
不思議なレストラン 心の居場所 ここにいても いいのですね

.....

**笠木** 来年の寺子屋は木村講座4回、安達講座4回だそうです。私たちは地に足をつけた知識

と知恵を持たないと、この時代は乗り越えていけないと思います。政治家やテレビに出る人たちの言っていることは信用できない。何を頼りに生きていったら幸せになれるのか誰にもわからないような時代です。必要な情報は、自分の足と手を使って汗を流しながら手に入れていただきたい。

最後の歌は『あなたが夜明けをつげる子どもたち』です。30年前に作りました。この歌の中で「みんなといっしょに歩いていきなさい」という歌詞があります。「みんな」の中には、イスラム教、仏教、キリスト教の人や、自分とは考えが合わない人も入っている。考えの違う人間や異文化の人といっしょにやるのはたいへんなことですが、それをやらなければ、私たちのしあわせはやってこない。歌った以上は、いやなやつともどうやって折り合いをつけていくか、お互いの生き方や言葉や文化を尊重しながら共存していけるかを考えていきたい。

私たちは、同一化することはやったが共存することが難しい民族だということを自覚しながら、やっていきたい。

♪ 『あなたが夜明けをつげる子どもたち』 詩・笠木透 曲・細田登

演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦、会場のみなさん

見あげてごらんあの山を 山につづく深い空を  
あなたの生命より偉大なものは なにもないんだ この地上には

あなたが夜明けをつげる子どもたち  
素足で大地をかけぬける子どもたち

.....

(アンコール)

笠木 寺子屋の校歌『わが大地のうた』をみんなで歌いましょう。さきほど岡田さんが言われたように、この歌が民謡音階で作られているとは私たちは意識していませんでしたが、なぜ、こんなにたくさんの人に広がっていったのかなあとは思っていました。

♪ 『わが大地のうた』 詩・笠木透 曲・田口正和

演奏・笠木透と雑花塾、安達元彦、会場のみなさん

カラマツ コメツガ 針葉樹林 かもしか 月の輪熊 走る稜線  
そびえ立ち連なる わが山々よ そびえ立ち連なる わが山々よ

いくたびか春をむかえ いくたびか夏をすごし  
いくたびか秋をむかえ いくたびか冬をすごし

.....

(第6回寺子屋・笠木透コンサート終了)

